講 演

8月30日（土） 11：00～12：30 大ホール

テーマ：ショパン時代のパリ── 教育・サロン・劇場

講師：上田 泰史

金沢市出身。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。
19 世紀のパリ国立音楽院におけるピアノ教育に関する研究で同大学にて博士号を取得。
2010年に渡仏、2017年、ソルボンヌ大学にてパリ国立音楽院ピアノ教授ジョゼフ・ヴィメルマンに関する研究で博士号を取得。
2015年、日本学術振興会育志賞を受賞。日本学術振興会特別研究員（DC2, SPD）の他、国立音楽大学、東京藝術大学、桐朋学園大学等で非常勤講師を務める。
2022年より京都大学人間・環境学研究科准教授。ピティナ音楽研究所音楽研究室長・上級研究員（非常勤）。

要 旨

ショパンは1831年から1849年まで、パリに生活の拠点を置いた。作曲はノアンなどパリの外で行うことも多かったが、サロンや劇場でパリの名士と人脈を築いたのは、ヨーロッパ文化の中心地パリであった。本講演では、1830年代から40年代のパリの音楽集団におけるショパンの位置を、教育、サロン、劇場の３つの視点から見てみたい。

フランスのピアノ教育の中心はパリ国立音楽院にあった。ショパン作品は1835・46年にピアノ科男子クラス、1847・48年に女子クラスで修了選抜試験の課題曲に選ばれ、ショパン自身も1837年に修了コンクールの審査員を務めている。タールベルク、アルカン、ヘンゼルトなど同世代の新作が教育に導入されたこの時期におけるショパンの音楽院ピアノ教育への貢献を、ピアノ科教授ジョゼフ・ヴィメルマンの教本を通して検討したい。

ショパンが音楽院と関わったのは、彼がパリ到着後まもなくヴィメルマンのサロンに出入りするようになったからである。1842年からはジョルジュ・サンドとともにスクワール・ドルレアンに移住し、ヴィメルマン家の隣人となった。ロマン主義と古典主義が共存する折衷的なブルジョワ的サロンで、ショパンは様々な音楽家と交流した。特に本公演では、1839年にパリを訪れたクララ・ヴィークを通したシューマン、ショパン、ヴィメルマン、アルカンのネットワークに焦点を当て、国際的な音楽交流の実態に迫る。

ヴィメルマンのサロンには、イタリア座やオペラ座の花形歌手やオペラ作曲家も集っていた。ナポレオンの劇場令（1807年）で定められた劇場とジャンルの区分は、グランド・オペラ、イタリア・オペラ、オペラ・コミックの様式区分をもたらした。パリの劇場文化を概観した後、ショパンが深く共鳴したイタリア・オペラを中心に、ショパンやマリー・プレイエルなど名手のピアノ演奏とイタリア歌唱の関係を装飾音や表現様式の観点から見てみたい。